

(曾於郡志布志町内之倉字倉園)

位置と環境

前川上流右岸にある標高約120mの四方を谷に囲まれた丘陵に立地している。

調査の経緯

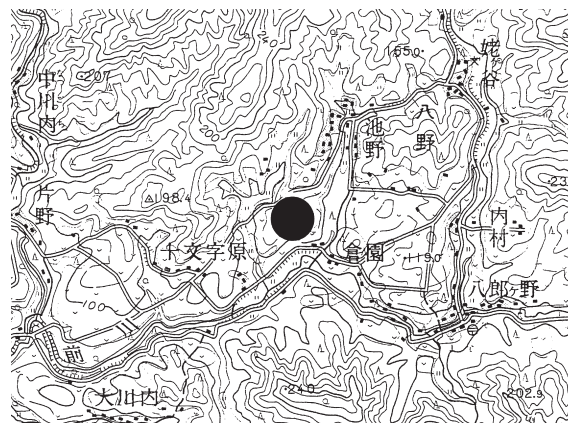
昭和57(1982)年と昭和58(1983)年に県営特殊農地保全整備事業(十文字地区)に伴って志布志町教育委員会が発掘調査を行った。

遺構と遺物

縄文時代早期前半期の遺構や遺物が多数発見された。

遺構としては丘陵中央の高地点を中心に、竪穴住居跡4軒、連穴土坑10基、土坑32基、集石遺構60基、配石遺構6基が検出された。

竪穴住居跡は重複していることや一部のみの検出であったため、詳細は不明な点が多い。土坑は楕円形を呈し、長径2m前後、短径1~1.8m、深さ1.1~1.8mの大型のもの(2基)と、同様な規模ながらやや浅いもの(30基)の2タイプに分けられた。前者は、底面に小ピットを有することから、落とし穴

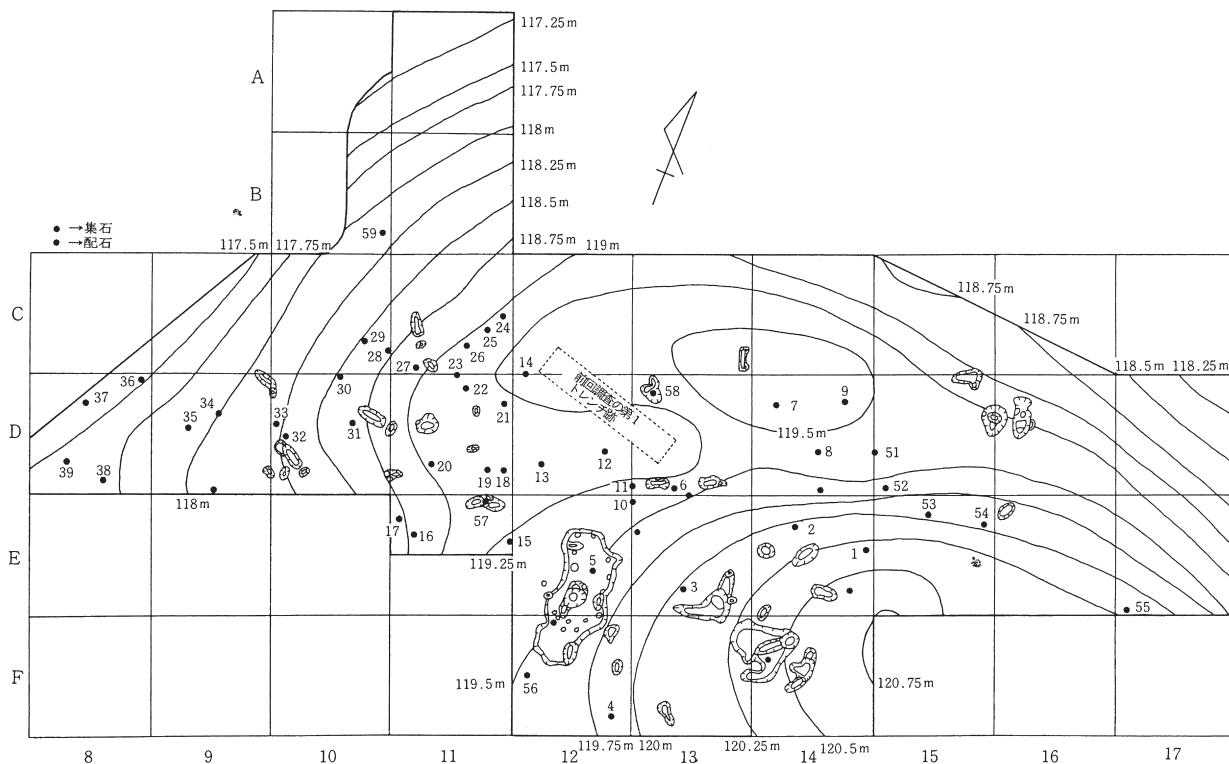


第1図 倉園B遺跡の位置

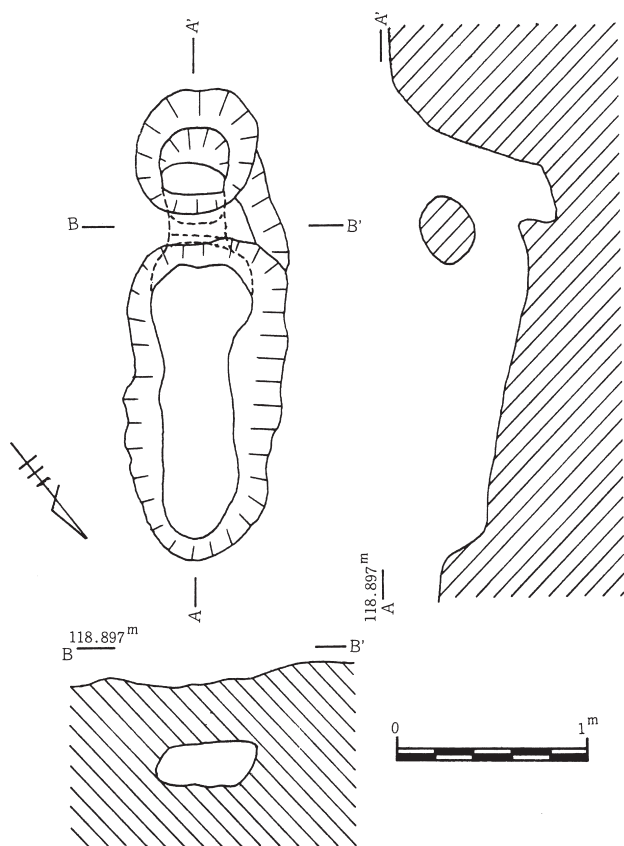
としての機能が考えられる。

遺物包含層全体に焼石がみられたが、特に集中している、いわゆる集石遺構が60基確認された。多くは掘り込みをもたないタイプであったが、49号とされたものは、すり鉢状の窪みをもつタイプで300個以上の礫が使用されていた。内部には多くの炭化物がみられた。この掘り込みは、連穴土坑(3号)と重複しており、関係が注目される。この遺構は剥ぎ取り処置を行った。

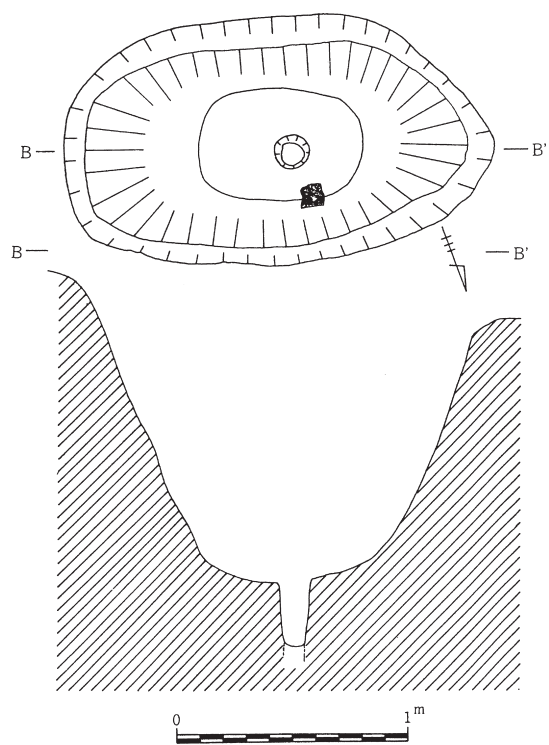
配石とされたものの中には、磨石3個の集積が2基含まれている。



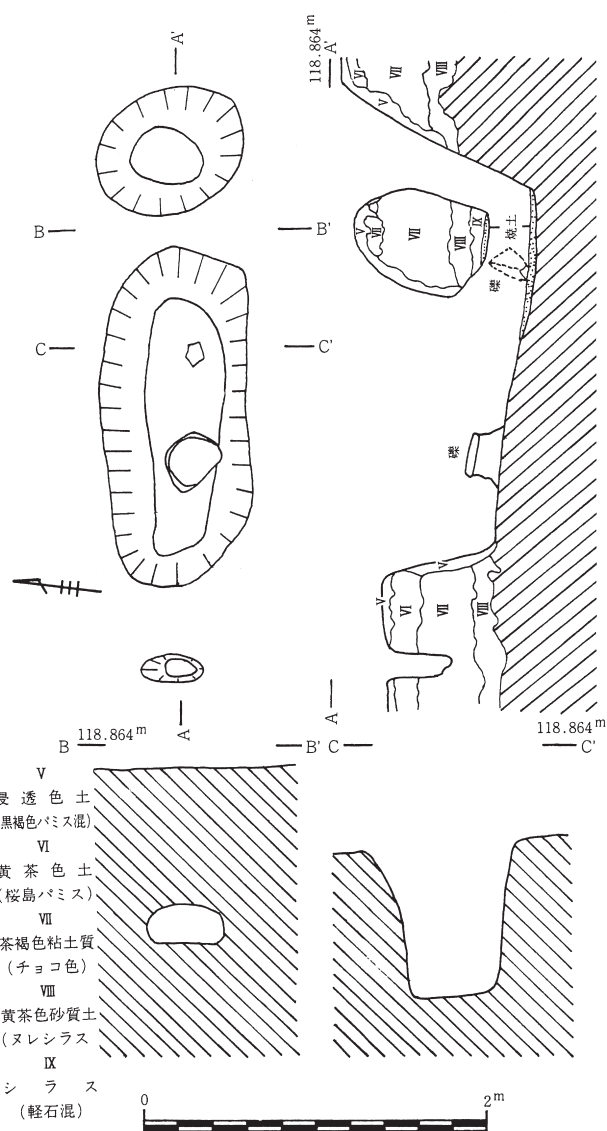
第2図 遺構配置図



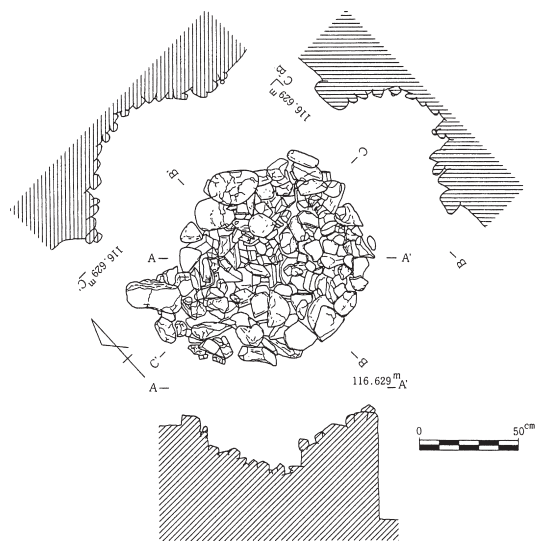
第3図 33号土坑 (連穴土坑)



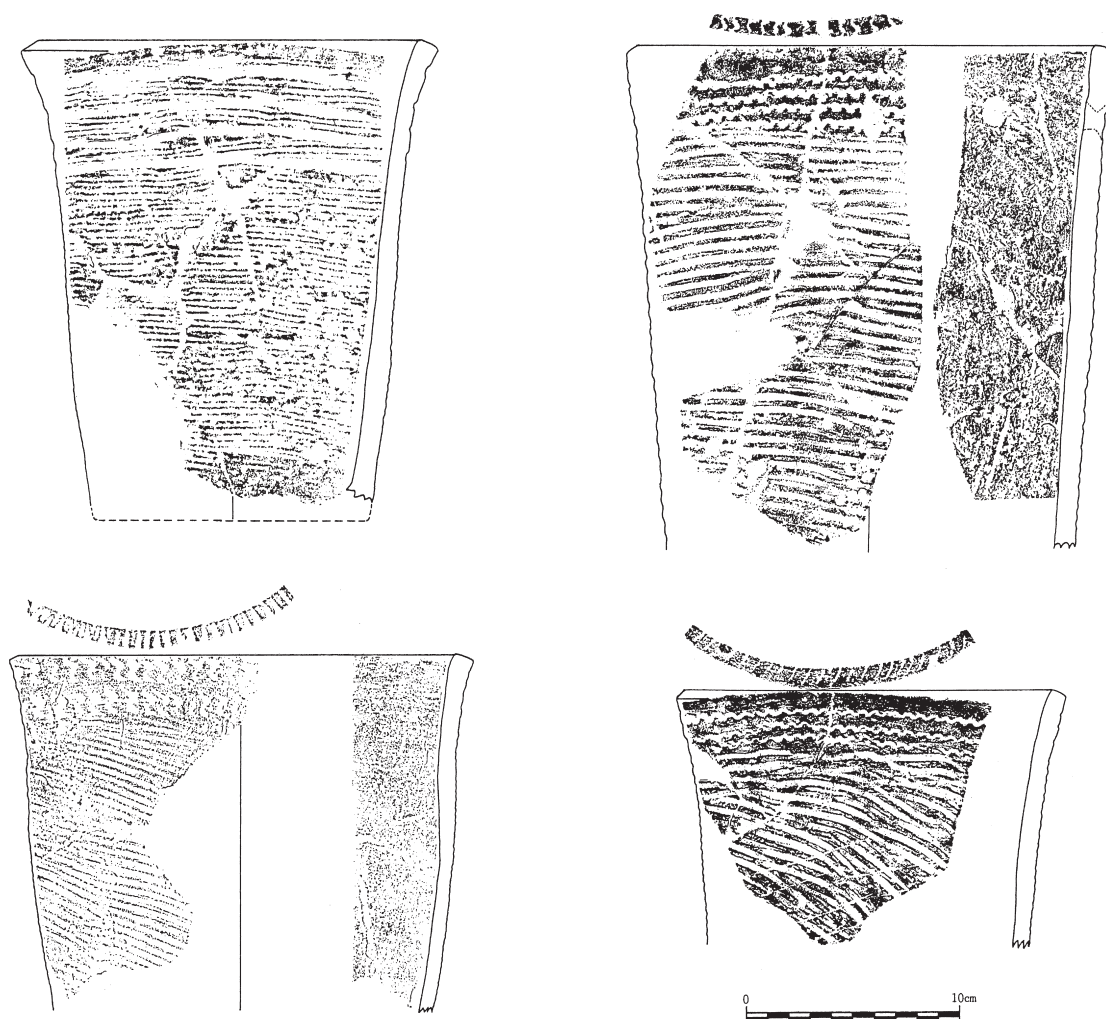
第5図 9号土坑 (落とし穴状土坑)



第4図 34号土坑 (連穴土坑)



第6図 49号集石



第7図 倉園B式土器

土器は、石坂式土器を中心に前平式土器や吉田式土器が出土した。石坂式土器は、口縁部が外反するタイプと直行するタイプの2種がみられた。また、吉田式土器と石坂式土器の変遷過程を示すものとして、後に倉園B式土器と呼ばれるようになった資料も出土した。

倉園B式土器は、口縁部がやや外傾しながらも、基本的には円筒形の器形を呈するもので、口縁部下に貝殻刺突文、胴部に貝殻条痕（斜位や横位）が施されたものである。胴部文様に特徴があり、吉田式土器の押引文と石坂式土器の綾杉文との中間的様相がみられる。

特徴

- ・縄文時代早期前半の集落跡である。
- ・連穴土坑が多く発見され、使用された痕跡が良く残っていることから、その使用法を想定するのに貴

重である。

- ・縄文時代早期前半の土器編年に欠かせない資料が出土した。

資料の所在

出土品と剥ぎ取り処理を行った集石遺構2基は、志布志町教育委員会に保管されている。

参考文献

志布志町教育委員会1983「倉園B遺跡・十文字遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)

志布志町教育委員会1984「倉園B遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)

前迫亮一1993「倉園B遺跡の再検討Ⅰ」『南九州縄文通信』7 南九州縄文研究会

(前迫亮一)